

図書館の徹底活用術⑩

図書館活用での「対話」を通じた学習支援
—Brunerの『可能世界の心理』に寄せて—

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館の有用な活用方策についての周辺を毎回紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の窓口に於けるレファレンスサービスでの「対話」という実践活動や経験を通じた学びに焦点を当てて今回は、Hallの「キャリア」にその焦点を当てつつ、『学びの共同体』として図書館員と利用者と共に学び成長することへの眼差し的一端を示しました。

ここでは、人間的な内面の在り方がその能力形成に影響するという点であり、学習支援者である図書館員もまた学習する主体であるということの重要性に言及しました。だからこそ、利用者と共に学び成長する共同体の一員として学習支援が成立するという認識に立脚して図書館でのサービスや「対話」を、利用者と共に学び成長しようとする実践活動の経験の一部として意識することの必要性にまで言及しました。

このことを受けて今回は、この「対話」へ視座を移したいと思います。そもそも「対話」とは大辞林などの辞書によると共通して「向かい合って話すこと」などと定義されていますが、これでは、“向かい合って「会話」”することと大きな差はない状況です。

教育学の世界では、この「会話」と「対話」は明確に区別されています。ここには、「聞く」と「聴く」のように意識的に相手の発するメッセージやそのプロットを読み解こうとする主体があるかどうかで大きく区別する場合があります。詳細は、前回までの「対話」に関する説明を振り返って見てください。この振り返りそのものが省察を導く「対話」の真髄でもあります。

この構造は、「対話」という経験を通して「暗黙知」が生成することに着眼した Polanyiにも共通しています。そして今回みなさんに紹介したいのは、ブルーナー (Bruner, J.S) の『可能世界の心理』(田中一彦訳、みすず書房、1998)

です。ここでは、人間が相手に対して発話する際の認知作用に着眼し2つのモードで説明しています。1つ目は、「論理・実証モード」です。これは、科学的に合理的な性質があり、「ある出来事についての陳述が、真か偽か？」という問いが立てられ、そこから、真か偽かを明らかにする条件設定を経て実証によってどちらかの解答が導かれます。2つ目は、「物語モード」で、これは、「2つ以上の出来事が、どのように関係づけられて陳述されるか？」に対して問いが立てられ、それぞれの出来事がどのような意味連関で結びつけられるかにその焦点が当てられます。どれが正しいかを決定することが問題ではないので、複数の解答(意味付け)が存在し得ます。

これらの認知作用に基づく2つの思考様式は、相反し、どちらか一方を排他するオルタナティブのような関係ではありません。寧ろ、両者は経験を秩序だて、現実を構築する異なるアプローチであり、お互いに相補的であるデュアルな関係であるということが出来ます。

この「物語モード」こそが「対話」の1つの現れであるということが出来ます。ここでは「対話」を成立させる発話主体とそれを「聴く」主体とが内面的に相手を受け入れようとする姿勢が不可欠です。科学的且つ合理的な「論理・実証モード」は所謂ディベートや討論のように自己の主張を相手に誤解無く伝達する際に有効です。ところが、図書館でのサービスやその利用という側面に鑑みると、相互の「対話」が重要であることは幾度も繰り返してきたことです。そこで今回は、この「対話」をもう少し掘り下げて説明することで、学習主体である皆さんの「対話」を促したいと思います。

えだもと ますひろ(准教授・図書館学・教育学)